俳諧十哥仙集

秋

へ 5
1645
3

門へ利5
1.645
3

小山文庫

俳諧十家句題集秋之部

○目録

七月立秋　今朝秋　来秋　初秋　初嵐一
柳蔭　一葉　一葉蔭　桐一葉　拵待　星月夜　文月
夕涼六月　七夕　牽牛二　星別　星仗　星会　星無
立琴　星迎　星合　二星　星夜三　秋七草
天河　鵲　彦の糸　梶の糸四　防鵲渡　七夕鵲
迎火　盆市　盆會　魂迎　魂祭　魂棚五
相撲　経　墓参　生身魂　刺鯖　鯖切　大文字
送り火　高燒籠　燒籠六　法と入　踊七　角力

露 八　露　雨冷　稲妻　秋風
夕入　木槿　花木槿　草花　女郎花　朝皃
瓢　青瓢　萩　萩　芭蕉　蘭
桔梗　相撲艸　角力草　角力取　西瓜
蓮実　藕節　稲の花　稲妻　早稲
稲木　刈麻　刈米　蜻蛉　とんぼ　ひぐらし
ひぐらし　むし　松虫　鈴虫　籠虫　螽
業虫　蟬　蜩　蛍　蛍火　秋立
秋夕　秋の夜　八月　八朔　名月　月
一ヶ月　待宵　月　月今宵　名月　今月
月見　十六夜　十六夜　有明　駒迎　蔦葡萄　芙蓉

本屋　巻耳　蔦　花蔦　尾花　蓋
葛の葉　葛の花　野菊　秋海棠　鶏頭　茗荷
金剛草　蓼花　稗蓼　芋　茗人形　稗茎子
むらさき　殘取　たちこ　燈籠　鬼灯　孫
鶉　鴫　世　初丁　雁　鶺鴒　甲　稲負鳥
鶉　かゝり　燕　燕帰　燕鳥　小鳥　四十雀
山雀　駒むかし　駒　そば　初鮭
江鮭　鮭　里　鮭釣　いなし　沙魚
秋刀魚　秋水　初汐　慕風　里二　秋山　門田
名見　稲刈　稲こき　蔦紅葉　唐黍　そば
明る　四十三　栗山子　引板　蔦の葉　麻　四十四　九月

重陽 四五 十日菊 殘菊 牛祭 升市 後の月 四六

十三夜 二夜月 菓 四七 小菓 菓作 菓畑

承和菊 [illegible] 五十 梅の菓 萬 萬の菓

蕎麥 [illegible] 五十一 銀杏 菓蔓 柿 小練柿 木濱

[illegible] 柿 榧 柚 梨子 推 栗 五十二

毬 南瓜 南天 蕎麥 梅蹂 乳母州

裏枯 芦穂 我木香 茸 五十三 松茸 板茸

茸狩 菌 松茸 [illegible] 新酒 秋寒

寒時雨 五十四 夜寒 長夜 秋寒 五十五 寒秋 五十六 行秋

九月盡 五十七

俳諧十家類題集秋之部目錄終

俳諧十家類題集秋之部

八千坊 輯校

〇七月

立秋 牛の背ふとる朝顔ちりやすし 州の花 麦林

[illegible] 、

[illegible] 、

[illegible] 来山

[illegible] 、

[illegible] 、

立秋や白髪もとぬる身のたち 、

秋[illegible]や何よ[illegible]佐阿波路　蕪村
[illegible]や[illegible]湯[illegible]　〃

今朝秋
淺茅の[illegible]吹消して[illegible]のあき　麦林
[illegible]　蕪村

来秋
[illegible]髪や[illegible]朝の秋　希因
[illegible]合[illegible]嘆く秋　蕪村
[illegible]の[illegible]の源　来山

侍四郎十歳に[illegible]
[illegible]秋を恨て[illegible]合[illegible]　〃

初嵐
[illegible]金[illegible]の[illegible]　蕪村
[illegible]のあらば[illegible]初[illegible]し　沾徳

柳茂
柳茂る[illegible]　蕪村

一葉
[illegible]の[illegible]　其角

一葉茂
[illegible]の[illegible]一葉川　〃

相葉
[illegible]　〃

井の柳
[illegible]の[illegible]相の[illegible]　〃

待
待[illegible]　蕪村

星月夜
[illegible]　言水

文月
文月や[illegible]毋の[illegible]　其角

[illegible]月や[illegible]牧牛の内　〃

文月

七夕　牽牛

文月や六日も常の如くにて　芭蕉

ちるやうに星は流るる秋の空　上

七夕や姉をさらるる子の哀　〃

紅粉の香もこの夜ばかりの織機かな　〃

織機ゆゑ紅粉やうとうて花ぞ咲く　泊徳

くらがりを牛曳出るいとなみ　〃

そそろそろ星はそろふて義理ぞ　来山

七夕を俗ごとかう浅ぎの郎　其角

そそろかに成りぬる牛車　嵐雪

孔雀はしらべ物ぞ星はそろふて　麦林

七夕や俗ごとの中に俳人　〃

滝殿の中に俳人星使　嵐雪

横笛の生るを待つや星の恋　希因

立琴や三琴中三の人の義をあらし　〃

星迎

舞の手に花活をそそろ迎　其角

丸掠の法師はしらべ迎　〃

星合

ゆく会成おすの縁を星の会　来山

星合やいつの夜ぶりの殺生のうり姫　其角

星合や双林寺の鈴の音　〃

[illegible]　其角

[illegible]

[illegible]　嵐雪

[illegible]

[illegible]　沾徳

二星　[illegible]百機の[illegible]

二[illegible]恨む[illegible]の娘[illegible]十又　其角

[illegible]

[illegible]

星夜　[illegible]

[illegible]　素堂

秋七種　[illegible]

[illegible]　来山

天河　[illegible]海[illegible]　其角

[illegible]　芭蕉

[illegible]　其角

[illegible]

[illegible]

[illegible]　嵐雪

[illegible]

鵲

きぬぎぬや　うかりける　てはいの
けうとけれ　揖の家もまつ　嵐雪
苔の中　庫の内　天の川　麦林
かくしぬや　たをおすしたてしを　其角
指ぬきの　鳥をつけをクうん　希因
うさぎ　おのの戻りをひろはし　来山
鵲の　紙ひろ　ようこ　麦林
うくふや　こうのうろ　指新　蕪村

彩の糸
梶の葉

梶乃葉ふと　朔　絵集の　ちりて

防鳥
仮

七夕鞦

迎火

盆市

盆会

魂迎

魂祭

素麺や　人目堤の　河原ぞい　嵐雪
ひるの日　新　鞦　ゆ　其角
ずくと　ゆ　迎火　嵐雪
数もつ　ぬ　蓮　賣　其角
うつくし　ぬ　ゆ　、
鄉山　を　芦の　芭蕉
揺の不の　ゆ　、
ぞそ　ぬ　門の　食の　釈迦人　其角
きの　へ　人　儲の　竟　、
答　の　ぬ　嵐雪

嵐雪

希因

麦林

来山

蕪村

嵐雪

霊棚の栗よ生えそめしいのちかな　来山

供ひや神ち魂棚　露　帝

魂棚やしら咲のいのちのみ　蕪村

棚経やしら咲のいのちのみ　其角

墓参

あいくるる扶り忘れの墓参り　芭蕉

白うの式器の掃や墓参り　其角

笑ふ人仏なるべき墓参り　嵐雪

生身魂

生霊侍のひとりぬ秋に　其角

御明り傳ひ消えや生身魂

刺鯖　刺鯖を長谷の小羽をこうしく　其角
鯖切　鯖切のかくてもあるべき大根と　〃
大文字　山のたゝを雪もえんとや大文字　嵐雪
　　相阿弥の青蘇をとやし大文字　蕪村
　　大文字やしけりてこのこゝろなるね　〃
送り火　送り火や宗鑑の老て十文字　其角
　　往と中くに火のそゝとやし旅の風　嵐雪
万燈籠　人魂を清てこゝろの灯籠う那　言水
燈籠　高燈籠滅うんぬとるけるし　蕪村
　　馬去ぬ燈籠仏の道しるべ　其角

灯籠うるる　嵐雪
　　其角
　　〃
　　〃
　　蕪村
　　言水
　　蕪村
　　沾徳
　　言水
　　〃

灯と入
踊

踊子成ていつらへかしてを小　其角
一生系統をおろしておくるる　〃
おとりてて歯の去命に消ゆる　〃
小姫の生ひたちたるしうみかり　〃
ふる月やひくらさほしさ姫のる　〃
伊勢の鬼又名ひとるふおかり歩　〃
咒生ちうるうしゆるうるおとるる　来山
をうちをよ祈をしてるるおるる　麦林
ふてうてふるの弁を嫁歩るる　来山
ひくふて大の写ケ鄭ておるる　蕉村

角力

蔭の後れ今せて行くるう那　芭蕉
昔ゆう稼又屋うく角力とる　治徳
俳句の学ると土山掃を角力取　其角
上ふるかぶ名も優ふと和撲元
トスやち志くくるぬきて辻角力　〃
ふる夜のるるよいやしを角力元　〃
投くもて訪うるうるうる辻和撲　〃
和撲を整月代の夕ふ那　〃
ふるやしとる雪人や姫の系ふ鈴　嵐雪
ふふる又人ふくくるる夜角力　来山

[illegible]角力を[illegible]　蕪村
夕[illegible]や仏[illegible]の角力ちら〳〵　〃
発入の力[illegible]　〃
[illegible]て孤[illegible]　〃
[illegible]水[illegible]　言水
[illegible]　〃
[illegible]　素堂
[illegible]　其角
[illegible]　〃
[illegible]　〃

[illegible]と[illegible]　嵐雪
[illegible]　来山
[illegible]　其角
[illegible]　蕪村
[illegible]　〃
[illegible]　〃
[illegible]　〃
[illegible]　〃
[illegible]　〃
[illegible]　〃
[illegible]　来山

霧雨

言水

素堂

甚角

蕪村

素堂

雨冷

稲妻

甚角

芭蕉

沾徳

甚角

希因

蕪村

稲妻やしら河の夜の声の底　蕪村

いなつるの一網うちやいせの海　〃

稲妻やしら八丈にてさらさらと　〃

杉檜ちる井の水しはよりの風　芭蕉

赤もちるちる姫風宮やうらの山　〃

物の箭のうちそなたうん姫の宮　〃

ちるちる世やあるも曲も下枝の実　〃

ちるちるやいつ月を作るちる秋の風　〃

猿とうきけん人捨るる秋の風　〃

義経のうら捨る似うりあるの風　〃

秋風

さうもうふるとて姫風やうら下り　沾徳

武帝うちを渡るやうら笠下の姫の風　其角

瘦うち多たちとうるはうら秋の風　嵐雪

秋うち寄のうら捨うち紅葉ちれ　〃

紅葉の名を西うちやうちとうせ　〃

清水の辻堂いちのあちれ宮　〃

雄うせやうちうちうち吟ちてうの髪　希因

青嵐ちうる秋うせの宮奥し　来山

秋うち宮やうちうちせちのうち吹　〃

あちこち風やし男世帝のなちくみ雪　〃

[illegible]　麦林
[illegible]　蕪村
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

身入

木槿　みゝうゑのト

[illegible]　其角
[illegible]　蕪村
[illegible]
[illegible]　芭蕉

朝顔の蔓ふみもとりの木槿くる　蕪村
通人の素湯をのまれて朝顔の木槿　其角
晩涼に作向て咲る白木槿　麦林
[illegible]　言水
[illegible]　芭蕉
七種の酢味噌のうれて蓮の糸　言水
[illegible]　麦林
[illegible]　芭蕉
[illegible]　言水
女郎花の[illegible]

花木槿

草苔

女郎苔

傷ましき鍛冶かつて女郎花　甚角

陽炎を行く入中ゝ　〃

牛ふまるる蛾ちらす女郎花　〃

西風の中よりおくる雁し　来山

鶏の雲折こうちてふくる雁し　蕪村

女郎花ちらす蝶なるらん　〃

うつれてもとの女郎花　希因

朝ぼらけ雲ふると門の垣　芭蕉

苦年の夢ふ雲こうふ垣の野　素堂

雲雨も幕の威ゝ　〃

朝ぼらけ雲ふる雲堂　沾徳

時雨て雨朝いとはよし　其角

幕の日ふるとも中ゝ女　〃

ふるとも雨の物　〃

ぬるとぼやうゝ人を升拾る　〃

幕を他所猫をいのうう　〃

あるとふやしふ宮拾に物　〃

朝ぼらけ　〃

幕ふるとの人のこゝろ　〃

ぬるとぼや大立の低水をゝ　希因

瓢

青瓢

其角

嵐雪

麦林

来山

蕪村

希因

其角

萩

言水

其角

希因

嵐雪

来山

蕪村

芭蕉

来山

其角

萩

芭蕉

言水

素堂

其角

芭蕉

嵐雪

蕪村

蘭

桔梗

角力草

道細し角力とり草の花の家

芭蕉

其角

芭蕉

来山

蕪村

其角

素堂

其角

唐瓜

唐稙

西瓜

雪ふる人のひとりぬれ流るらん　其角
身ひとつの秋をなげくらん　嵐雪
ふるうまと絶ぬ形りや　西凡
蓮の実とよ出て花ちる庵へ　素堂
蓮の実の波瀾を打くゝ行
蓮のくれなゐを少くゝうるをれハ　嵐雪
蓮の胥たゝれて美女の尸うゝ
稲のくるる吸ゝぬを怪の影の郭　言水
いなふんよ女結ゝ角田川　其角
早稲　早稲咲稲ゝる出ゝからの仕向ケ　来山

稲木　泉潟や稲木も絢の助　杖　言水
籾麩　ゝのうせの窠ゝゝゝゝゝゝ　嵐雪
新米　新米の板四ゝ一ゝ上川　蕪村
蜻蛉　山のゝゝとやんまゝゝゝ破ゝ　其角
とんぼ　日ゝ斜実屋の絶ふゝんぼる　蕪村
玉虫　玉虫ゝゝ掃ゝ捨ゝ所の捨ゝる　言水
虫賣　ゝゝ賣のかゝとゝゝゝ紅森が　蕪村
虫　海ゝゝゝゝ帝ゝ尾ゝゝ　言水
むゝ帝ゝ内ゝゝの小枇杷　蕪村
頻ゝゝゝ人ゝ屋ゝ　其角

今宵ちもしの一ふるひ蓬うめ　来山
やの雲ちもしのうちをし辻行雨　〃
むしてなしいのちふきの又講　〃
行ちもしにはせうるぬもしけり　〃
ちふ猪の舞ふるちうちけり　其角
かてをとうちもしけり　〃
ちもしの猫をそれちをはし　〃
ちうちもしはしけ搜さ海苔ち　〃
ちもしやう雪月ちんうをせて　〃
ちもしけ字紙字のちよけの菴　芭蕉

ちよもしの角ちし張りし牛　素堂
ちのもしけ時止又ちいふるを　麦林
ちもしや蛍ちるとゆれうり　蕪村
酒ちひてをちやけけちちち　其角
行ちうちもるを稲ちちちて冬ち　嵐雪
小蜻ちもちて蛍ふるもしる　芭蕉
猫ちくちのしを蜻の素ちを　其角
ちちち蟹ぬ枕のをちやちもし　芭蕉
家ちをて鼾ち入やちもしち　〃
居風呂ちもあ入ちちちちちち　希因

蠶
茱萸
蜻
蓑

嵐雪

言水

其角

来山

扇的花火　言水

花火　其角

蕪村

秋意　嵐雪

秋夕　芭蕉

秋夜　来山

蕪村

○八月

八朔　八朔や頭と足をかしこまる　麦林
　　八朔や角のとれたる二日月　蕪村

初月　初月の弓よ張るべし雁のこゑ　言水

　　そこやらにうつくしき方の初月　素堂

新月　新月やいつをもうつの男山　其角

　　秋月のんとうう童煙筒　嵐雪

　　新月や内侍所の榊の外

三ヶ月　行事らそてもゆをふたの春　芭蕉

三日月や朝臣の久しかるべし　素堂

三日月よりうるはしくたをれ星　言水

須弥の妹三日月こそ美人全　其角

中秋の月

情怜やしらるひ方の月

佛さの門を入るうの三日の月　麦林

待宵　待宵や明るこそ名なれ　其角

　　宵や宵やしるるひの雲　麦林

月　一ひら雲そそ敷き妹の月　言水

　　二階うらひとつの四畳半新月の月　沾徳

月の名は何なりけん衛門　沾徳

江を流れて夏来る月の須磨ぶる　素堂

せくしたる月ありてやゆかるらん　嵐雪

さらぬ時さらぬ青の小貝うの殼の月　来山

家〻に月の中宵過ぬ　芭蕉

来合せて又ゝる月や蓋の穂　来山

ゆゝの月拾ひうるまれうる　芭蕉

後〻も初ての月の蓋　芭蕉

ゆゝ新やまさりけりも青月哉　芭蕉

蛛も京ぶくるる月の所　芭蕉

我名は四角な新を宮の月　芭蕉

さうし詩よりの月も十六里　芭蕉

月さへ〻〻指さるゝ　芭蕉

ゆゝうれても風の彼岸過ぬ　来山

明るゝ霧さらる牛のまさを姿　嵐雪

氣年て我ゝ〻せゝ月哉新　素堂

月九ゝ〻ゝ〻れ世ゝ嘉表ゝ　芭蕉

満ゝを探ゝ〻ゝ須ゝの月　芭蕉

むゝの本乃むゝ〻ゝ月ゝ我　芭蕉

ゝゝも月ゝ遠ゝ〻れ所遠の　芭蕉

神々の行ひ給ふ夜月哉　素堂

月ゝ柿ちり残る木のうらゝ

我を待て我影さす月出ぬ

嫁入の荷ゝ見るれば月

月天心ゆきをまつ里のうらゝ

中〳〵ふ物ゝ行きて月を友

山の端や海をさそふ月も今

行月や波ゆ〻しくも明る海　沾徳

ゆくて居る雲ゝぬきの松の月

海ゝ濡て能くも月のそゝ山

山家より月ゆとゝさ淡世良

後松〳〵個の雲ゝそゝの月

月の後〳〵詩の無う山家川　甚角

雲家ゝ太平行ゝる月もゝ

庵下の行袖ゝし月の雲

月ゝゝ行ぬ波ゝ無ゝ

雲ゝ山ゝ時宗記て月のいろ

ちゝ月ゝ後ゝ後ゝ

ふゝゝ芋成ゝ平滝の月

月出ゝ在氏仏ゝ小海ゝ

雪の夜い[illegible]月[illegible]　其角

池[illegible]七[illegible]　〃

小[illegible]月を[illegible]　〃

[illegible]　〃

猿[illegible]　〃

[illegible]　〃

入月や[illegible]　〃

[illegible]　〃

夢[illegible]猿の[illegible]　〃

月を[illegible]の小者[illegible]雪の下女　〃

月今宵

月と[illegible]小[illegible]　来山

[illegible]　其角

[illegible]月[illegible]　萬村

[illegible]月[illegible]　希因

[illegible]　言水

月[illegible]　蕪村

[illegible]　沾徳

[illegible]　来山

名月

名月や[illegible]　芭蕉

名月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉

名月や座敷へ入るる山の端　〃

名月の光りさしそふ窓の梅　〃

名月や水に入るる山の端　〃

名月の出るや水に十三ケ寺　〃

名月や棒の先なる田の雫　言水

名月や仮寝もさらぬ浮世　〃

名月や人を抱きて縁に出る　其角

名月や能くも人のうき世話　〃

名月や一つ一つに独り寝　〃

名月や仏に供の花の影　〃

名月や月の上なる月の影　〃

名月や仏を見むる花の雫　〃

名月や御堂の敷きて家　〃

名月や十方の海を掠めて　〃

名月や石垣のすんと敷きて　〃

名月や重をめぐる仏頂珠　嵐雪

平等寺名月の雲ふきなれり　〃

名月の国友坊を男うの邦　〃

名月や[illegible]うふ[illegible]の[illegible]、
名月や[illegible]人の名のおのるれ、
名月や掛の枝をかへゝく、
名月や[illegible]うの人、
名月い[illegible]もおうゝぬ指う那、
明月や先[illegible]りて蔦[illegible]と顴、
名月や旅人の鬢のなびをぞ、
名月を絡る滝のひゝうる、
名月や風[illegible]て[illegible]れ　希因
名月や教を人伝ぬ冬の菜屋　蕪村

名月や人[illegible]て秋の月　嵐雪
名月や[illegible]も[illegible]を大根畑　来山
名月や再の山風目の[illegible]、
名月や押合ふ新[illegible]六歌仙　麦林
名月や[illegible]て虎渓の笑ひ寺、
名月や今[illegible]ちる掛、
名月や秋泉荒の魚[illegible]れ　蕪村
名月や面[illegible]る池のうへ、
名月[illegible]の[illegible]下[illegible]、
[illegible]の[illegible]の[illegible]の月　希因

今月

悄悄のうちに行くへやくらの月　希因
ものやうに成て人をうばやくらの月　沾徳
ものくるしてゆかたをしきうの月　言水
三寸の中ぬ男ちうらをうの月
おりくるくるつを抜の太布月
月をうらの知やうもうばきうの山
伊勢ものうもうをいうきうの月　甚角
ものしの所のものうらうもうらくの月
朝いふいはたはなれてきうの月
馬帽子屋いあほしうきて見うの月

秋茶

本毋寺にて京の食をうの月
汐汲をうくるもうんをうの月
不二ひ入食をうの餅やきうの月
弱とうえて釜霊猫をうの月
酒くうきうの敷うちうきうの月
川筋の開屋をいうの屋
弱屋所何西ゆうをうの月
十みうくう海をのうをうの月
いうをぬるうをうんをうをの月
土臭きゆうんをうきうの月　嵐雪

秋〳〵さ〻〻〻ぬきこの月　嵐雪
きぬぎぬの比丘尼ぬぎこの月　〃
仕舞る酒の香ぬきこの月　〃
青〻と青〻と青〻ときこの月　〃
海も山も坊主ばかりきこの月　〃
熊野こそ南向こそこの月　来山
とりわけ月見ばかりこそこの月　〃
きこの月小町の舟の上を西く　〃
海原はきもとりんきこの月　〃
ろすが小舟の月　〃

月見

もて渡る山とさ〻〻〻ぬきこの月　麦林
海と家とを白眼やさしきこの月　〃
忘れぬを思ひ出るかりこの月　蕪村
うりまくこの比を寒しきこの月　〃
仲丸の絞をせんきこの月　〃
きもちよ〻〻人を休むる月こそ　芭蕉
寒さ忘れこの月こせよ　素堂
冬ぬくし〻おりて手ぬかる月こそ　〃
孤独〻〻場を越ぬる月こそこそ　沾徳
ぬけてこそ〻〻この月こそこそ　言水

てらの角に丸き堂て月見うる　其角
おすてとるとつゝに後月見舟
人さやし月見ぶを仕見舟
姫ぎて丸本てらを月見の郎
雷よ揮いるひきて月見うる
律ゆゆ法おれをして月見ぶ
蝉を画て法を這て月見ぶ
うるぶひ月見る人をとみうり　嵐雪
鞆ちふ月見うりきぬ月見ぶ
月とうる海ひう京十三里　来山

十六夜

雙の鼻分をちくにより月見ぶ　芭蕉
ぶ月や新くうるく橋ぎり　其角
生天の月やひとりにひとつにて　蕉村
月うるや後ぎちうの庄屋　芭蕉
月の雲丹所市も通る月見うる　蕉村
十六夜ぶきうるの科の新う郷　芭蕉
いさうしや海光雲ぶの雲丸雲　芭蕉
やちゝ生ていさう人月の雲　芭蕉
十六雲月ぶ後雲ぶ十四日　其角
いさうひや竜眼肉の雲夜　芭蕉

[illegible]　来山
十六夜や[illegible]　麦林
いさよひや[illegible]
有明や[illegible]　沾徳
[illegible]　其角
駒迎
[illegible]　白蕪村
[illegible]　其角

秋　廿七

屠蘇
芙蓉
木犀
花野

月日の栗崩ふるかつらの井[illegible]　沾徳
[illegible]　其角
[illegible]　嵐雪
本屋や[illegible]人四人[illegible]　其角
[illegible]　希因
[illegible]　嵐雪
[illegible]　来山

薄

竪横の風の機織る音聞くなる　麦林

麦畑の時雨まれと花野なる　〃

二ヶ月をやとりえて布衣庵の邨　素堂

いそのうつ砧ばかり淋しかる　其角

宿かえるやもうう武蔵野の尾花　素堂

白雪の尾髪ふるとなる　其角

深雪を余所の物言う鶴の邨　希因

岩風中の淋しくなる庵なる　嵐雪

まきくらしん人なくなる　来山

山かくれて野辺を芝焼のとなる　蕪村

花薄

尾花

薄ゑたやなるらん人ぬかるとり　嵐雪

月門こ二里の体や芝焼なる　素堂

ちくしけ中山おもう花薄　嵐雪

花をもて信濃なるこしなうり　希因

松風の音ばかりなる庵なる　其角

なるなる列なるやくなる紀　〃

鳥せうむ人の寄るなるなる　〃

角の宮やいせの四国の花なる　〃

岩つくる弁風なるもれる紀　〃

芦寺なる寺けれる社柏なる　来山

藍
しら菊の中もまじるや藍畠　嵐雪

葛の葉
葛の葉のみ花いとしと根かな　其角
嵐の吹れたる葛の葉のうらおもて　嵐雪
葛の葉のうらみ㒵なる細雨哉　蕪村

葛の花
帝に奉て余りを法る葛の花　沾徳

野菊
名もしらぬ小草花咲野菊哉　素堂
なつかしきしをにがもとの野菊哉　蕪村
重箱に花なき時の野菊哉　其角

秋海棠
秋海棠西瓜のいろに咲にけり　芭蕉
立冬や秋海棠の瓜たれけり　麦林

鶏頭
鶏頭やしも川に並びの清水寺　其角
鶏頭を造花の菊にまじへけり　嵐雪
味噌で茶を食ふもあはれしけ冬　蕪村

葉鶏頭
やさし身のくだるゝ色や葉鶏頭　嵐雪

金剛草
根を引きて中々強し金剛草　言水

蓼花
醤油汲小屋の隈やしをるゝ蓼の花　其角
花もうし佐野ゝわたりの蓼の花　蕪村
三径の十歩に尽て蓼の花　蕪村

穗蓼
甲斐がねや穂蓼の上を塩車　蕪村

芋
芋かしら元僧都の二百貫　其角
いもを植て雨を聞風のやどり哉　、

葉人参
朝鮮の葉やうらんはふ人参　、

種茄子
ふくみあそひ北斗を拝ふ老の窓　、

むかご
蛾しきの葉に余りけるむかご哉　蕪村

綿取
生綿とる雨雲たちぬ生駒山　其角

烟草
たはこ干も山田の畔の夕日哉　、
よる日よりしるまてあかむ烟草哉　、
蠹て下葉ふ麻しきそのはてゝける　蕪村

烟草花
結ひゆくや烟草の花に蝶て休む　、

鬼灯
鬼灯や清原の女か生写し
猿引をさるの小袖をきぬた哉　芭蕉
そよかるゝ谷かけりあしの小松原　、

柘
二春の園をゆりしたゝかをぬく哉　其角
柘の間妻の戸たゝかるなり　、
安房剥まて竹や小枝をぬきて　希因
きをまとをおちくちやとらつ柘のさ　蕪村
うそく我ふ砕りてしくゝ又止ぬね　、
松風もそらゆハ落るきうぬくとかな　希因

鶉

蕪村

芭蕉

泊徳

希因

其角

麦林

蕪村

言水

鴫

雁

初雁

其角

泊徳

麦林

来山

芭蕉

素堂

言水

其角

鶺鴒

[illegible]

其角

[illegible]

嵐雪

麦林

蕪村

芭蕉

稲負鳥

[illegible]

其角

鶉

小百姓[illegible]

蕪村

かし鳥

[illegible]

其角

燕帰

[illegible]

[illegible]

蕪村

小鳥

[illegible]

四十雀

[illegible]

其角

山雀

[illegible]

芭蕉

[illegible]

其角

山雀や　樋の雫本々落ふるとる　蕪村

鵙もず　世界もせまくなりて鵙かな　

鵙　庭ちるもみぢ葉の雨ふるとも鵙の音雑々　嵐雪

さび鮎　ちらちらも鮎さびもうる山里哉　

河鹿　角大な河鹿や滝の下むせび　芭蕉

初鮭　かくしあり夕鮭人を張の夢を絮　其角

鮭の附者を亟庵の西おろす　素堂

江鮭　浦田降て志賀の夕晨　江鮭　蕪村

鱸　ちらほらと毎年ふるる鱸哉　其角

百日の鱸切てて鱸の鮓　蕪村

赤擢ちり鯨ちらり海のそら　其角

鯨汐　鯨上り鯨の良口おもや　吐　蕪村

いな　ちらちらと四ツ目のいなの光こる　其角

いとし　小鮒やしいの口ある蓮の門　

汐奥　そせがりの小糸溝する奥の雨　蕪村

汐奥汐やもやもや村山郭河霧の風　嵐雪

秋西　秋西やもやもや庵の門を洗ふ風　蕪村

沼ちり井戸ちりて雑の西　其角

秋水　狼の波本々ちりて　蕪村

初汐　初しほちりてのかる小巣　蕪村

暮風　八九月風やつこの石くの貝　嵐雪

野分　穂薄よおりつゝぬれぬかうれ　芭蕉

日数ふるしぐるゝ雲ふかうれ　言水

暁の空を額ゑこの暴風こうれ　〃

夕うらもたれを枕ゑ月ふ秋　麦林

月朱ゑるゝ雲ゑ小船てみゑ　来山

ゑ羽ゑのくゝ久方弱ゑくゝふ秋　蕪村

門ゑ月ゑ玄蕃ゑ其會ゑ那ふ秋　〃

禁ゑゑ我菩提ゑ神ふ秋　〃

市人のゑ色問ゑゑ秋ふ秋　〃

秋山　宮尾の二階下に来る那ふ秋　其角

門田　稲一穂門田ゑ涼む自然ゑ秋　沾徳

毛見　毛見の鳥のゑ下せゑ上川　蕪村

稲州　いはゝゑ稲を手に掛ゑ大井川　其角

稲ゑ　稲ゑゑ穀を掻る業の中　〃

麦穂　庭ゑの卯ゑ拾ゑ麦穂ゑ　蕪村

おち穂拾ひ日ゑるまゝ歩ゑ　芭蕉

唐黍　庭ゑ黍ゑ形ゑ萩のとゑ麦ゑ　其角

蕎麦花　ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ畠

[illegible]

素堂

宮殿冊〻蒸気科のそはふいたれ　蕉村

道のくもやまうつもそてそはぬ　〃

蓬谷の講を向し蕎麦のもれ　〃

坂本に酒はけ〻ふそはの乃茶　〃

歳る日のくるて深るそはの豈　〃

なるこ引おのり言葉を琴さぬ　麦林

なるこ鳴ふ麻もそるぶん吟るの戎　其角

七十の海をそそそそ吟る引　〃

吟る宋こ日の月もちうう〻れ　言水

鳴子

案山子

麻の言やかしの形も色れそて　麦林

月ちるて〻池ふい湯てうしうれ　〃

紅金の孫るさ兎の案山子　〃

まる月冊る新迎のかしハ笑ふ　来山

蝙風の毛ゆうて行案山子の形　蕉村

冊ふ行るる号をかしうれ　〃

そるて面倒そそうしう面　〃

秋汐よ見ぬるる危ぬるる案山子　〃

山信中佐吟るる引板の言　希因

引板

蕉村

落水

蕪村

麻

其角

麦林

秋田十四

希因

蕪村

菓留の宵　蕪村
麻ばかりくくりの木ぶりもをかし　、

○九月

重陽

ぬぎ入れの節句もをかしくくみ　麦林
菓の角菊とりけかしふるさとの　甚角
出茶の茶せもやもの菓　、
きくもまつ家〻つゆむ九日うる　嵐雪
湯てらて秋の夜ひと菓のつゆ　来山
栗の月中秋もものうらた　、
きくのきく稀さて寿る秋うる　、

十日菓

新世度十日の菊をうとてうり　甚角
雲菓の秋くもかのる菓るかう　、

残菓

此菓は十日の酒の亭〻うり　、
菓をうくく肉しゆをのくれ　来山
角文字のいと月もうく牛　蕪村
牛祭　外罪てふ別うる月ひう郎　芭蕉
外市　湿家ゆつの杉原ゆ中后の月　沾徳
後の月　ちうら中杉ゆ秋ゆて望う月　言水
ちみうう中ゆ青ち雲う秋の月　甚角
杉ゆ中ゆ月を菓ゆ中ちう雲ち、

後の月上のさるの日おそう那　其角
東ふかい　木ぬき　后の月　、
ちらくさを千くさくさ　後の月　、
四の赤をうらうて　名うしし　后の月　希因
ちちの雲　紙ぬて　後の月　、
南瓜の撫の結さ　しのちの月　、
ちうれて　池のひのこ　后の月　蕪村
山茶花の本のるくさ　后の月　、
十月のちをうをうれ　后の月　、
南人よ　ふうてのちのちにき　、

十三夜

青くうあくうくう　行七月の十三夜　素堂
秋よちうう　流うう　十三夜　沾徳
ちううちむうの　張舞十三夜　其角
蛙ちさ　白尾て　保の十三夜　、
葉ちち　泳八月　えぬの十三夜　、
那ちち　和ちて　十三夜　麦林
立磐の　我ち　十三夜　、
沼ちて　知ちて　十三夜　蕪村
ちちち　二夜の月　寒海て　素堂

二夜月

不二見波　二夜の月を一ちうる　、

菜

芭蕉

菜のめよりそうてうる麻もばし
、
菜の葉大根の小さきうり
、
つゆ〳〵咲九月九日のこと
、
寒菊やし合地居の背戸の菜
、
蝶も来て邪を乱す菜の寸法
、
山ちるの入畑三菜や三菜の花
、
人伝のいらもや冬の居の菜
、
と朝夕入れと引合菜や菊の節
、
宿入のよしや蕎麦ときのこと

泊徳

花ちるや小さき小さき菜の花
、
浅菜や山の上の桜たをり
、
對の屋うり嫁入を森て菜と天
、
さの形のよわうり菜こうとなる
素堂
うり〳〵せめぬ琴や作ぬ菜の花
、
ちるもの〳〵ときの人の菜を拾ふ
、
菜畑や子ら待人の笛と麦
甚角
さくの雪や瓶うり金うりうと
、
白鶴の参るうりぬ菜乃露
、
菜咲や筆のえんの切てかうり

希因

其角

希因

其角

嵐雪

[illegible]

嵐雪

[illegible]

[illegible]

来山

蕪村

末山

蕪村

治德

蕪村

治德

麦林

言水

其角

小菓

菓作

菓畑

菓和菓

紅葉焚

紅葉

嵐雪

希因

[illegible]　嵐雪
[illegible]　蕪村
[illegible]
[illegible]　希因
[illegible]
[illegible]　嵐雪
[illegible]　其角
[illegible]　言水
[illegible]　芭蕉
[illegible]　其角

梅紅葉
蔦
蔦紅葉
羅錦

銀杏　[illegible]　蕪村
[illegible]　其角
[illegible]
茱萸　[illegible]　嵐雪
柿　[illegible]　其角
[illegible]　素堂
[illegible]　来山
[illegible]　其角
[illegible]
[illegible]　嵐雪
[illegible]　言水

小練柹
木練柹嵯峨にて浮世を知らぬ也　来山

木渋
渋上る樽ながらも木渋桶　其角

ころ柹
隠居の月は隣をころし柹　沾徳

樝
樝の売れし跡て山の木の実つへよ　嵐雪

柚
子ゐ庵の柚の香ふかし白ひ哉　其角

梨子
くゝめはるゝ手にしれ常に男秋屋　沾徳

椎
椎拾ふ横河の児のいとまかな　蕪村

栗
閑来るし椎の里の売主あり　其角
まき栗をまくり隠れぬる山家かな　、
いくらかふ秋の名をき栗のありひかな　、

栗売の声いろ〱宗房が跡　、
閑寺の人留守なりや栗いかいたし　、
栗備ふ恵心の作の弥陀仏　蕪村
去年より又さびしひぞ秋の暮　沾徳

毬
山川や毬につゝまれ秋のくれ　嵐雪

南瓜
南瓜やとかく世に経て腹ふとし　素堂
なんきんや人のこゝろの思ひかな　其角

南天
きんてんや嫁をむかへる小家の山　、
南天の実をばうしろにしての庭　、
ねられぬ夜をきゝあかしての夕かな　、

梅孫　折々に心うつしし梅ゑだ　蕪村

梅のうつし折や手水をうきぬら

乳母料　乳母料まよ法むしてゝ朔の雪　芭蕉

裏拾　うぐいすれやしてうてゝ餅ゝ山

うゝ拾やしかくもめんぢの涙木　其角

芒穂　芒のほやし懶とやうて折もせん　蕪村

ゝゝの穂やゝ夕やうと笑ゝ　其角

芦の穂やゝ蜑和の絵をうし　嵐雪

我亦香　山陰よ入ゝ月ゝ　来山

草　冷泉の深数よ紫きる草ゝ　言水

香の香ゝ香ゝ吹ゝ月ゝ草　素堂

松茸　すりゝけやゝ手ゝ入付寒望　其角

十唱勺其一其表　不　二　班　ナリ　麓　茸　沾徳

援茸　海ゝ湧の涙ゝ　嵐雪

朽木ゝ見ゝ　素堂

茸狩　ゝけうゝ入付ぬゝのゝ　其角

菊や法華の花の肩ゝ

茸うゝ山の花ゝ　ゝ

ゝゝゝゝ皇の生ゝ如ゝ

茸うゝ法を華ゝ表月　蕪村

蘭

行くてして旅の土やまの石垣　其角

松露

秋の雨やしの〻ぶ色の雲　素堂

萩苔へ伏うを松露を乱る　蕪村

新豆腐

茶の香しの吟しの山路の月　其角

新酒

足ひきの亭主の笑ひ酒の中　嵐雪

我のみし人の酔ふ人の酔ふ　蕪村

秋寒

鬼貫や新酒の中の月の下

露時雨

うき人の云て聞せし時雨　沾徳

秋雨の音のしの〻ぶ雨の音　嵐雪

夜寒

ふるさとの月も寒しと搗もの　其角

猿なくや夜寒の月の雲の波　蕪村

長夜

隣なる人のこゑ聞て夜の月　〃

起てかなしき長夜の月　〃

浮世をば長夜の月の雲の波　〃

ながながと夜を又浮世の波　来山

秋の夜と四つの年の旅なれば　沾徳

なかなかの秋の夜通の速水の月　来山

山寺の杉の梢の月の雲の波　蕪村

かなしき鶴のとうふう姿の雪　芭蕉
ちらつく向け我と淋しき姿のくれ　、
世遠や行人うしなひたるのくれ　、
樟守非下るよ鹿もう秋の雪　言水
青海や海苔よるうて秋のくれ　其角
高い山の不二よ雲ふやけたるの雪　、
いきのくれ紙又のふうふうえて　、
ふくいきの物うなしひや秋の雪　、
吳竹の長口ちらちら姿のくも　、
ものを絶えて指の撥中秋のくも　希因

ちらちら生てうしろ歩やし秋のくも　嵐雪
ゆくゆくの我面くれ秋の雪　、
乗て行て又絶えてもの秋のくれ　、
いきの雪ふる山寺のうるのきく　、
もれいうぬ人物ふうう姿の雪　麦林
九年毎ハ尾も腐ず姿のくれ　、
好のくも花の崖もぬけて　、
淋しさ秋ふうれふうふうふ雪　蕪村
ちうとうれ雪ふうとうれ姿の雪　、
門を出れうれ我も行人姿のくれ　、

暮秋

いちしく向きに眺めてゐる秋の雲　蕪村

父母のことのみおもふ秋のくれ　〃

去年より又さびしいぞ秋の暮

旅の称や寝し処も秋の暮　〃

かなしさの鳥辺の地蔵たり沖さびし　〃

秋ふかき隣は何をする人ぞ　芭蕉

鬢風を吹て言頬杖する人ぞ行く秋そ　〃

下簾たゝまつりおろして夕されきりの暮　其角

旅の人は淋しい作の様見えつゝ秋　〃

うきの秋有職の人は宿を去す　蕪村

行秋

旅くれば秋の行くやられの秋　〃

いさゝかな價をいはせまぬ宿の秋　〃

行かされ梢のとのしよ言の秋　芭蕉

行く旅の梢をかへて彼ひとり　麦林

梢くらき手をかゝへ秋を傷らむ猶そ　〃

行かきの尽しくれに見るを惜む　〃

ゆく旅やひとゝ喜きかへて言ひ尽くす　希因

九月尽

見し月や大かた晴て九月尽　其角

寐ぬ夜半の風身のうへ知をとはすかな　〃

より残る月の名へ届や九月尽

年ゝまたくれ明日うり九十日　来山

俳諧十家類題集秋之部終